

2/10 野生復帰後の那須どうぶつ王国での個体管理と次年度の飼育方法

1. 野生復帰後の個体管理

(1) 飼育羽数

雄 2 羽（茶臼オス、N11）、雌 2 羽（黒、骨折ヒナ）の計 4 羽を飼育している。

*N11 は保険集団から合流させた個体

<骨折したヒナの状況>

7 月 30 日に左の脛足根骨を骨折したあと、ギプスで固定を施したが、患肢を引きずって歩くため 8 月 4 日には左の第 3 指に解放骨折が起こった。開放創からの細菌感染が広がり、8 月 15 日には左の中足骨から遠位が壊死脱落した。9 月 4 日の X 線検査では、骨折部位は癒合していた。

健常肢と長さをそろえる目的で、患肢端に綿球を付けてバランスを取れるようにしているが、患肢に負重をかけにくいいため健常肢に頼った歩行が見られる。健常肢のみでバランスを取ろうとするため、健常肢の湾曲が見られている。

運動を促すために屋外放飼場への放飼も試みたが、環境を警戒し伏せ続け、餌をほとんど食べないため現在は終日屋内放飼場で管理している。人間総合科学大学の義肢装具の専門家に依頼をし、義足の開発を進めている段階である。

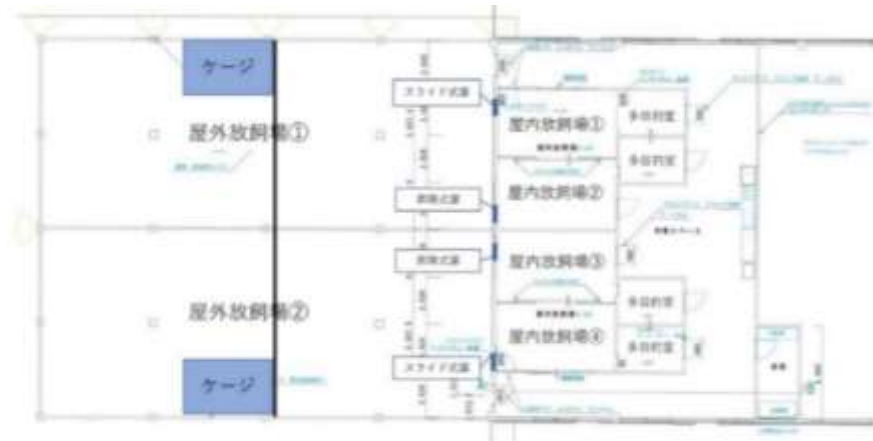


(2) 飼育環境

家族輸送後、各部屋の消毒およびそれぞれの部屋に設置してある衝突防止用ネットを新しいものに交換した。9月10日、雄2羽をそれぞれ屋内放飼場①、②へ移動し、黒を屋内放飼場④、骨折ヒナを屋内放飼場③へ移動した。

日中、雄2羽は屋外放飼場①を使用している。12月13日までは放飼場を半分に仕切った状態で、互いの姿が見えないよう仕切りをブルーシートで覆っていた。12月14日からはブルーシートを取り外し、仕切りの防風ネット越しに互いの姿が見えるようにした。18日からは2羽を同居させ、屋外放飼場①全体を2羽で使用している。

屋外放飼場②は、半分に仕切った状態で黒が半面を使用している。骨折ヒナは終日屋内で管理している。



(3) 換羽

茶臼オスは秋羽に換羽後、冬羽へと完全に移行せず、数カ所に秋羽が残っている状態で12月上旬に換羽が止まった。12月14日以降、N11との同居を開始してから冬羽が多く抜ける日があり、現在は冬羽と繁殖羽が混在している状態である。

N11は秋羽へ移行せず、繁殖羽が多く残っている状態で12月上旬に換羽が止まった。12月14日の茶臼オスとの同居以降、冬羽が多く抜け、現在は繁殖羽が多い状態である。

黒は12月上旬に冬羽への換羽が完了した。12月末から羽が少しずつ抜け始め、1月中旬には抜ける枚数が顕著に多くなったため、1月15日より夜間の常夜灯の照度を下げ、23日からは照明器具による日照時間の調整(=ライトコントロール)を中止し、昨年の管理と同様、那須の日照時間に合わせる対応を取っている。それ以降、1日に抜ける羽の枚数は0~5枚程度である。乗鞍岳に合わせたライトコントロールは、昨年同様3月上旬に再開する予定である。

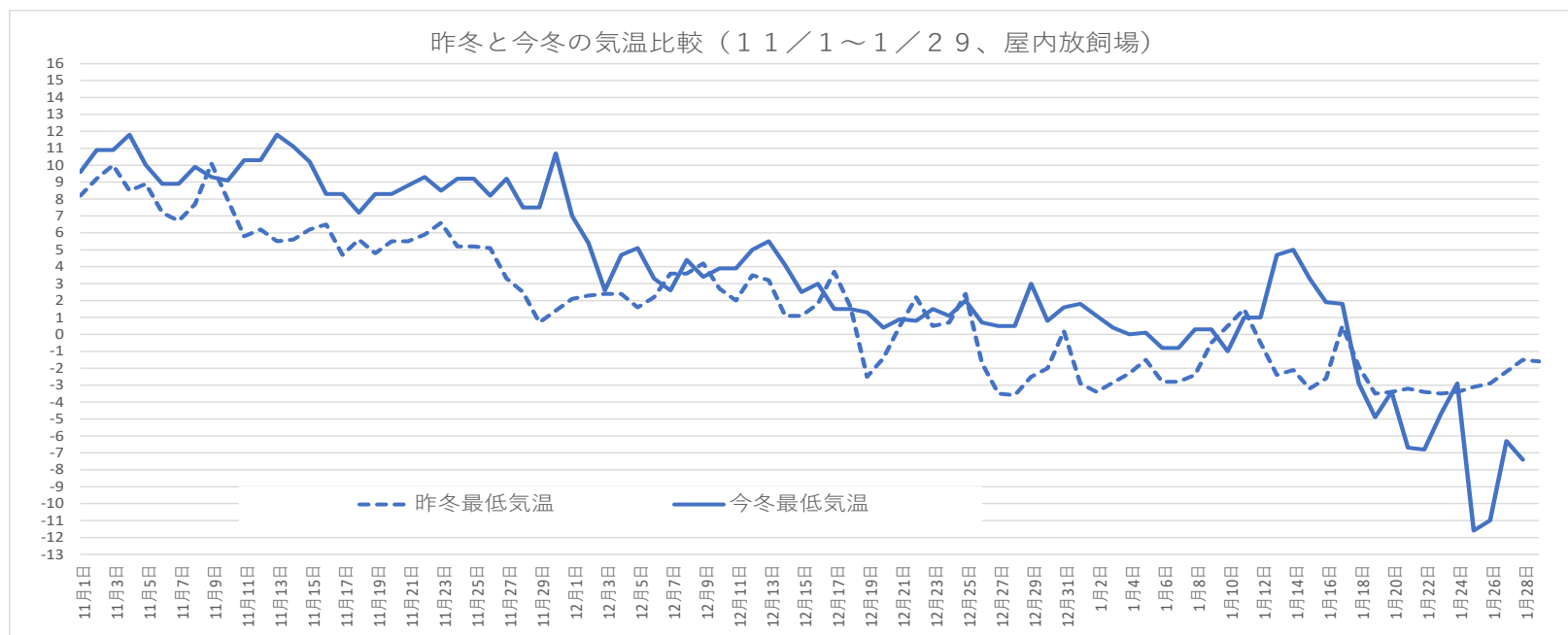
なお、照明の調整は雄2羽に関しても黒と同様の変更を加えた。

換羽に乱れが見られる要因として、①昨年と異なり日照時間を調整していた(上述)、②今年は1月中旬まで気温が高い傾向だった、③昨年より積雪量が少ない、といった点が考えられる。

今冬は、昨冬よりも気温が高い傾向にあり、屋内放飼場に設置した温度計では昨冬は12月19日に初めて氷点下を記録して以降12月中に7日間氷点下を記録したが、今冬は12月中一度も氷点下にならず1月6日に初めて氷点下を記録した。1月に関して昨年は28日間氷点下を記録したが、今年は17日間だった。

積雪に関しては、昨冬は12月13日に初めて積雪したあと一度溶け、12月18日の積雪以降は3月中旬まで土壌が露出することはなかった。今冬は12月17日に初めて積雪したが土壌はほとんど見えている状態で、その後12月22日までに全て溶けた。12月24日に再び積雪したが、その雪は1月15日までにほとんどが溶け土壌も大部分が露出していた。1月21日から2月下旬にかけては常に積雪があり土壌の露出もなかったが、2月終わりから温暖な日が続いて雪が溶け始め、現在では土壌の約半分が露出している状態である。





※最高気温に関しては、昨冬は換気窓を閉めた状態で測定し、今冬は開けた状態で測定しているため比較不可

今冬の屋外放飼場の積雪状況



12/17



12/22



12/24



1/15



1/20



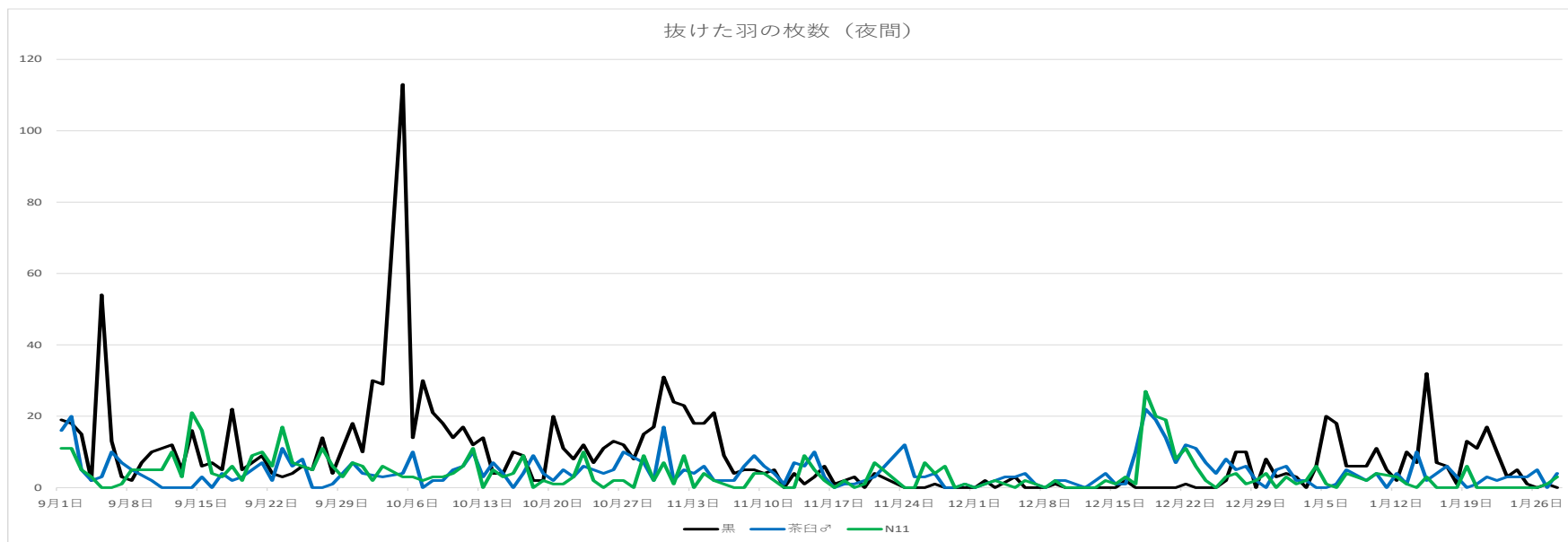
1/21



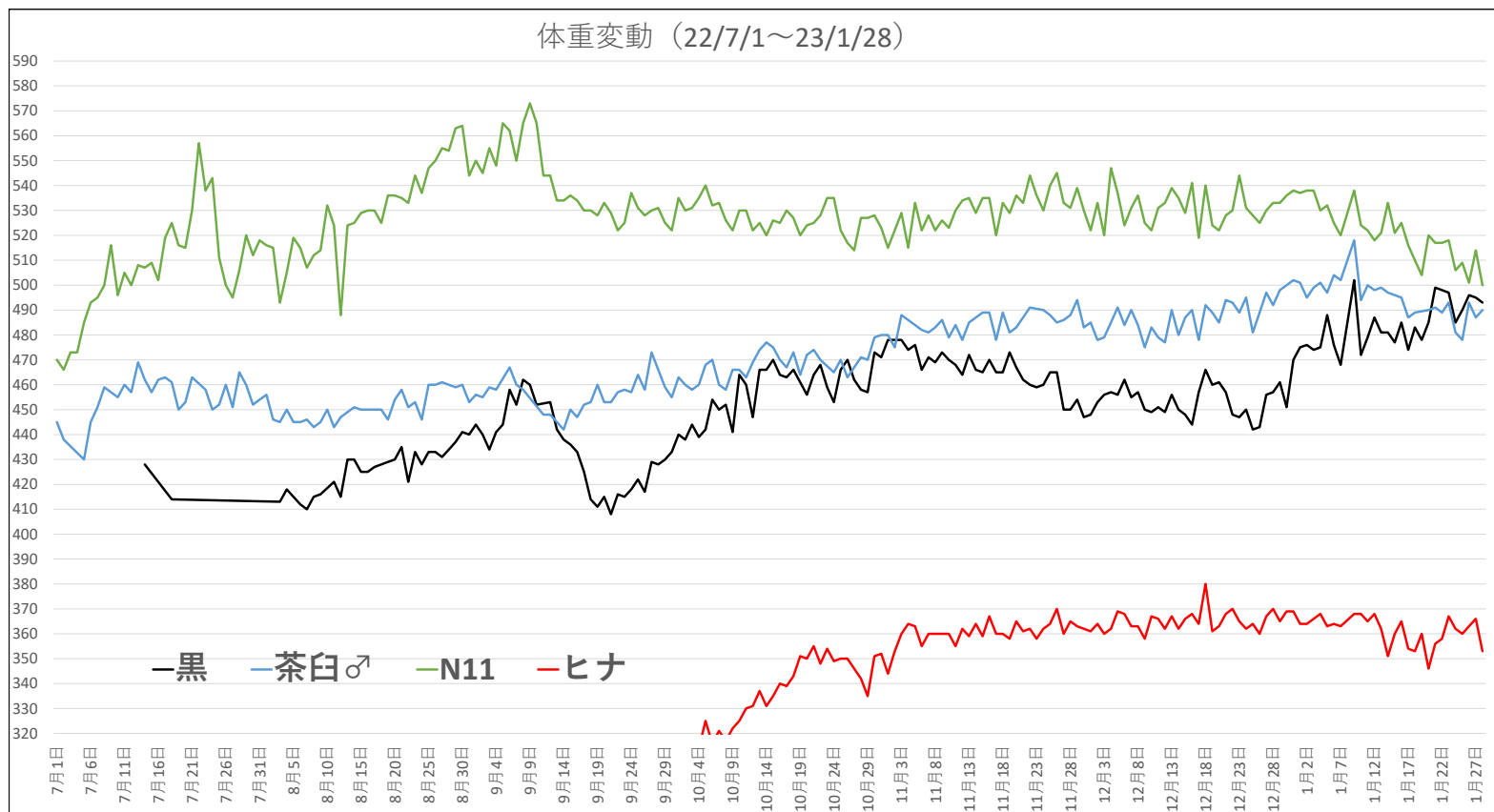
1/31



3/2



(4) 体重



成鳥は3羽とも9月10日の部屋移動に伴い一時的に体重が減少したが、その後12月下旬まではおおむね安定していた。黒は12月下旬からの換羽による影響で増加傾向にあり、現在3羽とも500gあたりで推移している。骨折個体は11月以降360gあたりを維持している。

(5) 餌

現在はライチョウ専用ペレット（40～50 g/日）、コケモモ（10 g/日）、リンゴ（10 g/日）を基本飼料とし、ハイマツの実（10 粒程度/日）を 11 月上旬より、ヤシャブシ冬芽（不断給餌）を 1 月上旬より与えている。ダケカンバも 2 月以降与えていく。

（6）高山植物の管理状況

昨夏は高山植物の栽培にも取り組み、当園の環境下ではガンコウランやコメバツガザクラ等の小低木はプランター栽培より屋外放飼場に地植えしたほうが長く維持できることがわかった。一方でオンタデやムカゴトラノオ、イワツメクサはプランターや育苗ポットでの栽培に向いていた。現在、育苗箱やプランター（計 10 個程度）は施設横に置き冬越しさせている。



2. 次年度の飼育方法（今年度との変更点）

（1）環境

- ・ 去年の繁殖期に神経質な様子が見られた黒は、現在では担当者の手から餌を食べるなど、人への馴致は進んでいるように見えるが、繁殖期は特にストレスを与えないよう最低限の干渉にとどめ、その他ストレスになり得るような環境変化や物音等に注意する。
- ・ メスの寝室と隣り合う部屋をオスは使用せず、オス 2 羽は整備が整い次第、屋外に設置した特製ケージを寝室として使用予定。

（2）ペアリング

- ・ N11×黒（昨年同様）と、茶臼オス×保険個体群由来メスの 2 つがい形成を目指す。
- ・ 保険個体群由来メスの候補は N97 を検討。各種検疫（病原性細菌（2 月末に実施済、検査結果陰性）、高病原性鳥インフルエンザウイルス、クラミジア）を実施し、オスを特製ケージに移動させた後、順化施設に移動させる。屋外放飼場①もしくは②を使用予定。施設移動に伴う飼育環境の変化により体調を崩す可能性もあるため、慎重に観察し必要であれ

ば適切な検査、処置を講じる。

N97…2020年7月18日当園で孵化。親はN11×N49。既往歴、換羽異常は無い。

人工育雛で成育。人に慣れている。

単独平飼い、現展示個体。昨年夏、もう1羽のメスと群飼育中に1卵産卵が見られたが当個体のものかは不明。

体重 606g（2月10日時点）

- ・ 昨年は産卵時期が野生個体よりも遅かったため、今年は見合いを4月中旬に始め、同居は4月下旬から行う。（昨年のお居は5月6日より開始）

（3）営巣

- ・ 営巣環境は昨年同様。
- ・ 昨年は初卵の産卵に気付かなかったため、産卵前後の体重増減に着目し、巣内カメラ映像と合わせて産卵日を正確に把握する。

（4）餌

- ・ 昨年は2月下旬～3月中旬の体重減少に対し、嗜好性の高いウサギ用のペレット（バニーメンテナンス）を与えたが、これにより野生個体より産卵個数が多くなったとも考えられるため、今年はいちよう専用ペレットのみで他のペレット飼料は混ぜない。
- ・ 4月以降、ビタミン（ネクトン）とカルシウム（牡蠣殻）の添加を行う。
- ・ ミルワームは体重測定時の際など最小限に留め、ネクトン等をダスティングしたものを使用する。

（5）孵化・育雛

① 家族飼育

メスが子育てに専念できるよう、観察等は離れたところから行い、極力ストレスを与えないよう配慮する。

② 餌

基本的に昨年同様に行う。ミルワームの栄養価を高めるためにダスティングを行う。

③ 野生順化

基本的に昨年同様に行う。

野生に近い腸内細菌叢の獲得を目指し、凍結乾燥糞便と高山植物の給与を積極的に実施する。